好色一代男

松田 修 校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第四八回）
好色一代男（こうしょくいちだいおとこ）

昭和五十七年二月五日　印刷
昭和五十七年二月十日　発行

校注者　松田修（まつだおさむ）
発行者　佐藤亮一
印刷所　大日本印刷株式会社
発行所　株式会社　新潮社
〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四―八〇八

装画　佐多芳郎
組版　シーティエス大日本
製本　新宿加藤製本

定価一七〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Osamu Matsuda, Printed in Japan, 1982.

目次

凡例……七
巻一……一三
目録……一四
けした所が恋のはじまり……一六
はづかしながら文言葉……一九
人には見せぬ所……二三
袖の時雨は懸るがさいはひ……二七
尋ねてきく程ちぎり……三〇
煩悩の垢かき……三四
別れは当座はらひ……三八

巻二……四三

目録……四四
はにふの寝道具……四六
髪きりても捨てられぬ世……五〇
女はおもはくの外……五四
誓紙のうるし判……五八
旅のでき心……六一
出家にならねばならず……六五
うら屋も住み所……六九

巻三……七五

目録……七六
恋のすて銀……七八
袖の海の肴売……八二

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

是非もらひ着物……八六
一夜の枕物ぐるひ……八九
集礼は五匁の外……九三
木綿布子もかりの世……九八
口舌の事ふれ……一〇三

巻四……一〇七

目録……一〇八

因果の関守……一一〇
形見の水櫛……一一四
夢の太刀風……一一八
替つた物は男傾城……一一三
昼のつり狐……一一六
目に三月……一一〇
火神鳴の雲がくれ……一一四

巻五……一三九

目録……一四〇
後は様つけて呼ぶ……一四三
ねがひの搔餅……一四六
欲の世の中にこれは又……一五〇
命捨てての光物……一五四
一日かして何程が物ぞ……一五八
当流の男を見しらぬ……一六三
今ここへ尻が出物……一六六

巻六……一七一

目録……一七二
喰ひさして袖の橘……一七四
身は火にくばるとも……一七八

心中箱……一八三
寝覚めの菜好み……一八七
詠めは初姿……一九一
匂ひはかづけ物……一九六
全盛歌書羽織……二〇〇

巻七……二〇五

目録……二〇六
その面影は雪むかし……二〇八
末社らく遊び……二一二
人のしらぬわたくし銀……二一六
さす盃は百二十里……二二一
諸分の日帳……二二六
口添へて酒軽籠……二三一
新町の夕暮嶋原の曙……二三六

巻八……二四一

目録……二四三
らく寝の車……二四四
情のかけろく……二四八
一盃たらいで恋里……二五二
都のすがた人形……二五六
床の責め道具……二五九

解説……二六七

付録――『色道大鏡』による世之介悪所巡りの図……三〇九

凡例

〔本文〕

一、本文は国文学研究資料館本によった。原本については解説参照。

一、読者にとっての読みやすさを目的とし、なおかつ、原文の趣を残すべくつとめた。

一、付訓を含めて歴史的仮名遣いに統一した。

例　かえ名→かへ名　なを→なほ

一、異体字は原則として通行字に改めた。

例　穐→秋　菴→庵　鱣→鰻　白→顔　庄→座　尻→尻　煎→煎　逮→違　逃→逃　野→野

温存した例　鴈　綷　鰛　塗　娌　聊尓

一、行草体・合成字の類は通行字に改めた。

例　さま→さま　候→候　より→より

一、当て字、誤刻の類は原則として改めた。

例　浅間敷→浅ましく　暑間→熱燗　有増→あらまし　大形→大方　拘→抱　嘉様→かやう

間鍋→燗鍋　心知→心地　倩念→つらつら　段子→緞子　計・半→ばかり

温存した例　偸間　浮雲く　荒猿　位勝げに　日外　口鼻　念記　吸啜　隔子　石流　前載

難面くて　海藻凝　牧方　密柑　歯枝

一、送り仮名は、読みやすさを目的に送ることを原則とした。

例　独→独り　入海→入り海　心立→心立て　入て→入りて　出す→出だす　見捨難くて→

見捨て難くて　打笑ふ→打ち笑ふ　静に→静かに　忝し→忝なし

一、清濁、半濁については適宜改めた。

例　たて髪かつら→たて髪かづら　ぽんと町→ぽんと町　さつはり→さつぱり

一、反覆記号は、漢字が二字重なる場合の「々」以外「〳〵」「〻」の類は使わなかった。

一、漢字を仮名に、またその反対の改訂も行った。

例（漢字→仮名）　或→ある　爰→ここ　是→これ　比→ころ　其→その　抔→など　也→な

り　與風→ふと　重而→重ねて　責而→せめて　頓而→やがて　稠しく→きびしく

例（仮名→漢字）　は音→刃音　いせ参→伊勢参り　みや嶋→宮嶋　八わうじ→八王子　住吉

や→住吉屋　きる物・きるもの・着るもの→着物（きるもの）

一、本文に、同一の事物に対してさまざまな表記がなされているばあい、あえて統一しなかった類に次の例がある。

例　若狭・わかさ　若松・わか松　なが津・ながつ　大臣・大尽・大じん・大名　読む・

訓む・よむ　革踏・足袋・足踏

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

一、目録章題の表記は原本どおりとした。ただし、異体字については本文に準じて改め、一部付訓を加除した。

例　劦→州　京→京　女事→女事（をんなのこと）

一、本文章題の表記は、本文に準じて送り仮名・付訓を加除した。
一、段落は校注者がつけた。
一、会話、心中思惟を適宜「　」または『　』で括った。
一、句読点、中黒点は意によって校注者が付した。

〔頭　注〕

一、現代仮名遣いによることを原則とした。ただし、引用文は歴史的仮名遣い、引用書名の訓みは、現代仮名遣いという古典集成の方式に従った。
一、本文の「太夫」は「大夫」に統一した。
一、年齢は数え年とする。
一、地名の現在名表記は、原則として見開き頁の初出のみ「現」と付してある。
一、＊印を付した箇所は鑑賞の手引きとなるものである。
一、スペースの関係で、同義語を‖、縁語、連想語、関連語の類を→印で表したところがある。
一、原則として段落ごとに小見出し（色刷り）を付した。

〔傍　注〕

一、逐語訳であることを意図したが、時に意訳をした。

一、本文に省略されている語を〔　〕内に、（　）内に会話の話者を示した。

〔挿　画〕

一、国文学研究資料館本によった。

〔解　説〕

本書の校注に当っての私の試みの基本は、先入観を一切持たず、『好色一代男』を己の目に即して翻読すればどのような読み方が可能であるかというところにあった。天和二年の大坂の市井の一読者になったつもりで、つまりは初心を方法として読めばどのような『好色一代男』が浮上するか、いわゆる研究者としての目を基底に沈めて、作品とじかにむかいあう読み方をここで試みた。かいつまんでいえば『好色一代男』の一つの読み方の提示である。

〔付　録〕

一、付録として「『色道大鏡』による世之介悪所巡りの図」を付した。

好色一代男

入絵

好色一代男

一 折角の燈を消した（消させた）そのことが終生恋の闇にふみこむはじめ。「けした」は、「怪したる」（不思議な、奇怪な）の意に手燭の燈を消すをかけたもの。「ちひさい形して恋の最中」（『独吟一日千句』）。

二 腰元が少年の春の目ざめを心得て、うまく処理した（「心ある」は、才覚・働きがある）の意とも取れる。

三 「文」は手紙一般であるが、ここでは恋文の意。往来物（書簡体）の文体は、一種独特であった。

四 八歳の少年のになう恋の重荷は山のようだとの意（「思ひは山々〈あり〉」などという）から山崎（現京都府乙訓郡大山崎町と、大阪府三島郡島本町大字山崎に跨がる地。中世、油の名産地であったが、近世に入り衰えた）の地名をひき出したもの。

五 挿画参照。水と濡れ（恋）は縁語。

六 雨にあって袖を濡らすのはいやなことだが、雨が縁になって、恋が成り立つものなら雨にかかる（「濡れる」と「このような〈成り行き〉」の両意とをかける）のがかえってさいわいだ。

七 男色で年長の兄分をいう。また念友とも。年少の若衆の方から、兄分を恋慕する。

好色一代男　巻一目録

七歳
けした所が恋はじめ
こしもとに心ある事〔早くも〕二 抱いた恋心

八歳
はづかしながら文言葉三
おもひは山崎の事四

九歳
人には見せぬところ〔見たぞ見たぞ〕あたりをさ
ぎやうずいよりぬれの事五 行水を見たことからしかける恋

十歳
袖の時雨はかゝるが幸六
はや念者ぐるひの事七

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c